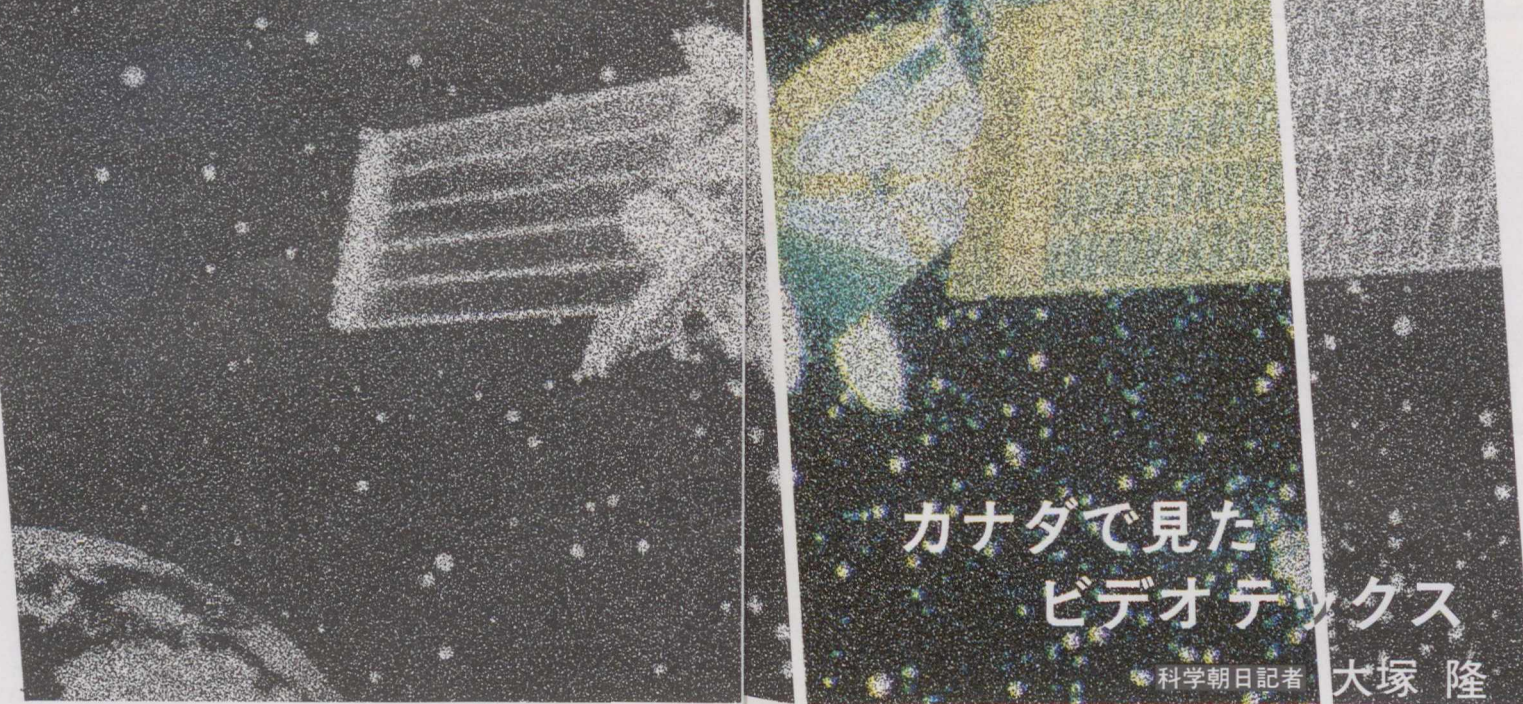


# 特集 カナダのニューメディア



## カナダで見た ビデオテックス

科学朝日記者 大塚 隆

ビデオテックスという言葉が浸透し始めてきた。テレビ型のディスプレイ端末を電話線に接続し、センターのコンピュータとの間で画像を使った双方向の通信が可能な最新の情報通信システムのことである。CATV、直接衛星放送、パソコンによるコンピュータ・ネットワークなど注目を集めているニューメディアの中でも、本命のひとつとして期待されている。

このビデオテックスの最先端の姿を見ようと、昨年の秋、カナダとアメリカのいくつかの都市を取材に訪れた。ビデオテックスは七〇年代初め、ヨーロッパで生まれた技術だが、七〇年代の後半からはカナダ政府の通信研究センターが中心になって開発したテリドンという方式が、世

界のビデオテックス技術をリードしているからである。

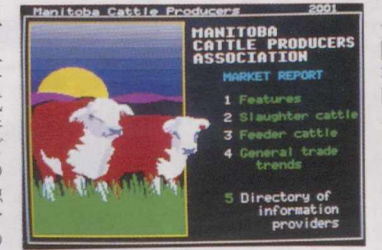
最初に訪れたウィニペグ市は、世界的な大穀物産地として有名なマニトバ州の州都。マニトバ州は面積が日本の一・七五倍もあるが、人口は百万人余りにすぎない。しかも、その半数以上はウィニペグ市と近郊に集中している。周辺部の人口は日本では想像できないほどに稀薄だ。このウィニペグ市で、三年前から、農家を対象にしたグラスルーツ(草の根)という農業情報システムが実用化されている。ビデオテックス先進国カナダでも、初の実用化システムだという。

グラスルーツのシステムの開発・運用を担当しているインフォマート社のウィニペグ事務所、農家での利用の実態を

見たいと頼むと、早速、近郊での取材を手配してくれた。

ウィニペグから大陸横断ハイウェイで約一時間。黒褐色の畑と牧草地が地平線まで広がる大平原のどまん中、低い防風林に囲まれた一画に、目ざすロンフrostさんの家があった。

フロストさんは、二十代半ばの独身の農業青年。案内された六畳ほどの自室には、小さな書棚と机、その上に電話とテリドンの端末、そしてベッドが置いてあるだけ。



「グラスルーツ」の農業情報。

「今では、このテリドンがぼくが一番大切なものになりました」という彼は、手慣れた様子でウィニペグ市にあるグラスルーツのセンターを呼び出してくれる。最初に画面に出てきたのは、北アメリカ全体の天気概況の画像だった。

「農家に一番役立つのは気象情報です。この地域の子報だつて見られるんですよ」

手元のキーボードを操作するだけで、画面はこの地域の午後六時の予報に変わった。天気だけでなく、気温、風向、風速が細かく表示される。日本のテレビで見ると天気予報よりもはるかに詳しい。

情報は至れり尽くせりで、世界の穀物相場に重大な影響を与えるもうひとつの穀物大生産地、ソ連のウクライナ地方の前日の気象状況まで調べることができる。

観光地や名所の案内ばかりでなく、劇場やコンサート、市内の主要レストランの案内など、情報の種類はかなり豊富だ。レストランなら、その店のおすすめメニュー、値段、営業時間、場所までわかるから、電話で確認する手間が省ける。

このテレガイドもスポンサーの広告料をもとに運営されている。ホテルやレストラン、劇場といったところが、自分の情報を有料で登録しておき、利用者が随時それを見たいという仕組みだ。

このシステムも、実はグラスルーツと同じく、インフォマート社の開発したもので、インフォマート社は、カナダの出版社サザム社と、カナダ最大の日刊紙トロント・スターの発行元、トルスター社が七五年に設立した電子出版という未来技術専門のハイテク企業だ。

テレガイドはトロントでの好評がものを言つて、すでにカナダやアメリカのいくつかの都市から引き合いが来ている、という。

「八四年の春には、サンフランシスコでも動き出します。そのほかにも、計画が進行中のところがいくつもあります」とインフォマート社のトム・ワード取締役は顔をほころばせた。

もちろん、カナダの実用化ビデオテックス・システムは、これ以外にも数多くある。トロントに限っても、州営のテレビ局、テレビ・オンタリオの「エデュネッ

グラスルーツのシステムでは、農家にとって最も関心の強い穀物や家畜の取引引き相場も、市場に設置されているコンピュータを通じて刻々知ることが出来る。

「これまでは出荷時期になると、ウィニペグまで一日のうち何回も市外電話をかけていた。それが、このおかげで全く必要がなくなりました」とフロストさん。グラスルーツは、営業相談にも大きなページを割いている。穀物畑にはびこる雑草の効率的な駆除法を知りたいければ、除草剤利用法という項目を参照すればいい。作物や雑草の種類など要求された情報を端末に入力するだけで、センターのプログラムがマニトバ州雑草駆除ガイドに基づいて、最も効果的な除草剤の使用法、単位面積当たりの値段などを即座に教えてくれる。

こうした実益が手伝つてか、グラスルーツの加入者は次第に増加している。その八割まではマニトバ州内の農家だが、二千キロ近く離れたアルバータ州の農家や、国境を越えたアメリカ中西部の農家も利用者になっている、という。

このグラスルーツにも泣き所はある。システムの値段が張ることで、現在は専用の端末が買い取りで七百五十ドル(約十五万円)。システム自体の利用料は不要だが、電話会社に払う回線料は三ドル(約六百元)。フロストさんの場合だと、回線料だけで月に五十ドル(約一万円)はかかる。

「でも、グラスルーツにはラジオやテレビにはない良さがある。この地域の冬」と呼ばれる高校生向けの職業ガイダンスサービ、大型ショッピングセンター、イートン・センターの店内情報案内サービス「ビデオプレス」などがそう。連邦政府通信省の資料によると、実験中のもも含め、国内だけで全部で三十近いビデオテックス・プロジェクトが進行中。

そうした先進的なシステムの大部分は、



トロントのテレガイド・システム(オンタリオ・サイエンス・センターで、筆者撮影)

インフォマート社のようなハイテク企業を中心になって開発を進めている。テリドンはもちろん、連邦政府が中心になって推進しているナショナル・プロジェクトだが、それを支える若いハイテク企業が、いくつも育ってきているのは注目に値する。

オタワの通信省で会ったテリドン・プロジェクトのクレイグ・テイラー技術顧問は、「カナダのテリドンをフランスのワイン、デンマークの家具、日本のカラーテレビに負けない、世界に誇れる技術に育て上げたい」と熱っぽく話していた。

は厳しいから、冬の間はどうしても出不精になる。そんな時に、この端末でメッセージ交換するのは本当に楽しい」

むろん、こうした人のまばらな地域を対象にして、簡単にシステムの採算がとれるはずもない。グラスルーツの情報は、それぞれに関連する業種のスポンサー付きて提供されているが、それだけでは大幅な赤字である。

ビデオテックスは、都市ではどう利用されているのだろうか。

オンタリオ湖畔に広がる人口約二百万人のトロントでは、テレガイドと呼ばれる情報案内サービスが観光客の人気を集めていた。

カナダやアメリカの都市を旅行すると、たいていのホテルでは無料の情報案内誌が配られている。この内容をすっかりコンピュータに収めてしまったのがテレガイドである。見かけはゲーム・センターにあるテレビ・ゲーム機そっくり。だが、こちらはコインを入れる必要はなく、利用は全く無料だ。空港、ショッピング・センター、ホテルなど、人の集まる場所には必ずこの端末が置かれている。トロント名物、世界一ノッポのCNタ